

のき、んたりし餓死の様子は、關東へ聞えしよりも、直に其所を見ては、殊更におどろかれ、恐しき事共なりとの物語なりし。

〔十三朝紀聞光格〕天明五年九月、琉球犬飢、幕府貸穀萬苞、金萬兩于薩摩守島津重豪、以賑之。

〔視聽草初集五〕天明七丁未年、江戸飢饉騒動之事

一天明三癸卯年春中より雨降續き大水ニ而、麥作甚あしく候處、略中是冬上州淺間山燒候而、砂

を吹出し候よし、關東奥州筋、都而近國近在一統に、右之燒灰砂降候ニ付、秋作よろしからず、米穀

直段高直に相成候處、天明四甲辰年、又麥作惡敷、五月末より六月に至り、江戸町中に而、春米相場

小賣百文に六合五勺、或は七合位に賣買致し、町かた一統に困窮いたし候に付、七月十二日、關東

御代官伊奈半左衛門殿、江戸町中端々迄、人別帳ヲ以、御救米被下置候、略中それより天明五乙

巳年は、諸國ともに少々直段引下ゲ候處、天明六丙午年正月元日、丙午の日にて、午の刻に九分の

日蝕にて、諸人不思議の事に思ひし所、略中此とし七月、關東筋大水に而、諸作甚不作に而、近在の

困窮によつて、御代官伊奈半左衛門殿より、兩國橋廣小路へ施行の御小屋掛り、近在の百姓男女

へ、御救ひの施行糞出し下され候、尤日數十四五日の間、近在の百姓共老若の人數夥しき事に而

有之候、略中此としの暮に、御藏米御張紙三斗五升入百俵に付、金百七拾五兩之御張紙右之通故、

町方春米玄米ともに直段高直に而、一統難儀に及び候所、天明七丁未年の春、御藏前御張紙三斗

五升入百俵ニ付、百八拾兩、夏の御張紙三斗五升入百俵ニ付、貳百貳兩、右之相場に相なり候ゆへ、

町かた一統困窮いたし、其上此年四月上旬、燈油一向無之、大難儀、此上もなき事に而候、此砌町

方に而、諸國小賣相場の直段荒増書記す、

一金壹兩ニ付、上白米壹斗八升、中白米貳斗、下白米貳斗貳升位、小賣百文ニ付、上白三合、中白三

合五勺、下白四合の小賣相場ニ而候、